

## 第 48 回 2013 年の春

---

2013 年 3 月 28 日気象庁の発表によると、この年のウメの開花は平年よりも 29 日、前年よりも 4 日遅いということであった。さらに、桜は例年よりも 5 日、昨年よりも 10 日早く開花するであろうという予想であった。本文を書き始めた 4 月 5 日のネットで調べると、桜の開花は東京では平年よりも 9 日早い 3 月 16 日、満開が 4 月 2 日ということであった。仙台の我が家の庭のウメは、3 月 25 日ごろから花が咲きはじめ、4 月 5 日ほぼ満開であった。この二年來、庭のウメの開花にはそれほど関心は及ばなかったが、今年は冬の寒い日が続いたためか蕾の出る頃から待ち遠しく感じられ、真冬並みの気温の 3 月初旬からは毎朝、縁側の窓越しにウメの蕾のふくらみ具合を観察していた。開花後の天気の良い朝は市販の綿球をほぐして棒の先につけたもので丹念に授粉作業をしたものである。一方仙台のソメイヨシノは、ウメが満開になった 4 月 6 日早朝の広瀬川に沿った散策中の土手道から見渡す限りでは未だ開花の気配はなかったが、漸く開花を認めたのはその数日後であった。

気象庁によると、この冬の寒さは昨年よりは厳しくなかったというが、仙台に住む者にとっては、今年の 1 月、2 月はこれまでに経験したことのない、齢のせいとばかりはいえないような寒さであった。開花がウメで平年よりも 1 カ月も遅いということは、それを証明していると思う。3 月に入ってから漸く気温が平年並みになったことで桜の開花が早まったのであろう。

3 月上旬から 4 月にかけて、4 月中旬から福岡市で開催される第 113 回日本外科学会学術定期総会で発表予定の講演原稿の準備でいつもよりも忙しい日々を過ごした。外科学会の「創始と継志」という主題の分野で講演するために、かつて肺移植の実現に向けて関わった実験から臨床第 1 例までの 37 年間の研究生活をまとめた。それまでも肺移植のことに關して多くの機会でいろいろなところで話をしてきたが、今年の外科学会では「創始と継志」というメインテーマのもとに外科学の肺移植を含む 13 の分野でのメモリアル・レクチャーが組まれていた。「創始」の部分を筆者が担当し、引続いて「継志」で現在の東北大学呼吸器外科近藤 丘教授が講演することになっており、発表前から何故か特別に緊張しないではいられないほどの重荷を感じていた。

イヌを用いて肺移植実験を開始したのは今から半世紀前に遡る。

1963年4月東北大学抗酸菌病研究所(抗研)外科に大学院生として入局してまもなく鈴木千賀志教授室に大学院の新入同級生3人が呼ばれて、肺移植の研究をするようにと命じられたのである。3人のうち1人は間もなく移植研究から離れてしまった。筆者の研究テーマはドナーから摘出した肺をレシピエントに移植するという同種肺移植であった。実験を始めた頃はイヌの手術には狭すぎる粗末な実験室でかろうじて肺移植手術ができたが、初めの頃は医局先輩のW先生にモデル犬を作っていただき、筆者が術後管理をしたものである。そのW先生は、今は故人となってしまったが、移植手術の基本を厳しく教えていただき感謝している。間もなく恩師鈴木教授が肺移植研究のために文部省(当時)科学研究費を獲得されて、一戸建ての実験室ができたのである。実験開始2年後位から筆者も移植モデル作りができるようになった。

数年間肺移植実験に夢中で取り組み、鈴木教授に「君たちはドクターじゃなく、ドッグターだ」といわれたのもその頃からである。「君たち」と言われたなかのひとりの大学院同級生のK君は、自家肺移植の肺機能の研究に携わっていたが、自家肺移植のモデル作りでは肺門の肺静脈、肺動脈、気管支などの各種の吻合部の縫合部分の幅が同種肺移植よりも狭くなるため、手技の面でやや難しく、吻合手術の時間も長くなるが多かった。K君は術後徹夜で付きっきりで看病したり、麻酔から覚醒したモデル犬のために出前のカツ丼を与えていたことなどもあった。木造モルタルつくりの肺移植実験室にはスチーム暖房があったが、夜間暖房はなく、冬期の実験では種々工夫したが翌朝までの生存は厳しかった。春分頃から手術生存率が劇的に向上したのを覚えている。

思い出に残る肺移植犬は多いが、なかでも自家肺移植後5年および6年間、筆者自身が犬舎に通って世話をし、すっかり懐いてしまったイヌを一度だけの生理実験で失わなければならなかったときの悲しかったことは、今も忘れられない。これらの2頭を使って自家移植による片肺の肺神経切断後移植側の神経機能が回復するかどうかを調べたのである。その結果、肺神経切断による機能異常は生命維持には関係しないが、完全には回復しないということが解ったのである。

大学院終了後も肺移植実験をほぼ毎週続けていたが、本来の臨床でも呼吸器の手術にはよく当てられていた。当時「フジムラを殺すには刃物は要らぬ、手術を二、三度干せばよい」という作者不明の替え歌があったことを思い出す。

第113回日本外科学会定期学術集会ののち、関東在住の現在泌尿器科専門の医学部学生時代の同級生から何十年ぶりかで電話があり、肺移植についての講演を依頼され

た。彼は医学部入学間もない詰襟学生服を着ていた頃から学生時代に演劇部で5年間、学窓で6年間を共に過ごした親友のひとりであり、講演会ののちの楽しさは格別であった。

2013年春は、外科学会の時とともに何十年ぶりで会った学生時代の親友と過ごした短い時間も強く心に残っている。